



いじめられた子だったキャリアーは、ハイスクール最大のイベント、プロムでクイーンに選ばれる。写真は1976年、最初に映画化された『キャリアー』（ブライアン・デ・パルマ監督）で主演を務めたシシリー・スペイセック。

## 『キャリアー』にみる アメリカ的キリスト教の特異性

森本あんり

(神学・宗教学者)

キングのデビュー作『キャリアー』では、主人公のキャリアー・ホワイトの母親が「ほとんど狂信的ともいえる根本主義派キリスト教徒」という設定だ。作品に描かれた信仰は、実際のアメリカのキリスト教をどれだけ反映させたものなのか。宗教学の泰斗がキング作品に隠されたアメリカの知られざる歴史を分析する。

### キャリアーの母親の 原型はどこにあるのか？

キャリアーの生涯は、その最初の日から血まみれだった。いや、出産に出血が伴うのは当然だが、彼女の場合はそれだけの話ではない。その日、近隣の住民はホワイト家から奇妙な叫び声が発せられたのを聞いている。だが、隣人たちは関わりあいになるのを怖れて、すぐに警察を呼ぼうとしなかった。ようやく通報を受けてあらわれた警官が目当たりしたのは、血だらけのベッドに横たわるホワイト夫人と、床に落ちた肉切りナイフだった。彼女は、誰の助けも借りずに一人で出産し、自分でへその緒を切ったのである。横にいる赤ん坊は、まだ体の一部が胎盤にくるまれたままだったという。——こうして「血まみれキャリアー」の物語が始まる。

どうしてそんな事態に陥ってしまったのか。その説明で、この物語の背景が明らかになる。キャリアーの母は、「ほとんど狂信的ともいえる根本主義派キリスト教信仰」のせいで、周囲の誰とも社会的な交わりをもっていなかったのである。夫は職場の事故で半年前に亡くなっ

るが、その死もまた、彼女にとっては神の罰でしかなかった。何よりも、彼女は自分が妊娠したという事実を否認したまま、出産の日を迎えている。お腹の膨らみは、夫と共に犯した「性行為」という大罪に対する神の罰なのであって、自分は「女性性器の癌」でもうすぐ夫と同じように死ぬ、と彼女は考えていたのである。ここで読者は興味をかきたてられる。それほど狂信へと彼女を追いやったその恐ろしい「根本主義派キリスト教」とは、いったいどんなキリスト教なのか。

その答えをこの小説の中に探しても、無駄である。本書は、『ローズマリーの赤ちゃん』から『エクソシスト』を経て『オーメン』に至る一連のホラー小説ジャンルに数えられているが、これらの小説に比べると、その筋書きには神学的な要素がほとんど見当たらない。背景とされた「根本主義派キリスト教」についてわかるのは、人間の性やセクシュアリティにかかわることをすべて悪とみなす、という一点だけである。そのような教義をもつ教会がどこかにあって、ホワイト夫妻がそこに通っていたとか、誰か強烈な精神的指導者がいて、そういう教えを彼らにたたき込んだ、などという話も出てこない。本書の「根本主義派キリスト教」には、現実味

をもたせるような小説的造型がまったく施されていないのである。

それもそのはず、後に著者みずから語ったところによると、この人物の原型となったのは、宗教とは何の関係もない「宝くじかぶれ」の母だったからである。キングは、宝くじにうつつを抜かして子どもを顧みない家庭から通った同級生のことをよく覚えていた。着ている洋服は、一年を通してひと組の白いブラウスと黒いスカートだけ。級友たちはそれをよくからかっていたが、ある日その娘は、自分のお金で買った真新しい服を着て学校にあらわれる。ふわりとした袖の明るいチェック柄で、当時の流行だった服だが、それを見た級友たちは、いつそうひどく彼女をからかったという。

こういうときの子どもは残酷である。いつの世でも、どの国でも、男子でも女子でも。教師や親がどんなに心を尽くしても、いじめが学校からなくなることはないだろう。ことに自己イメージを気に病む思春期ともなれば、その暴力はいつそう過激で容赦がなく、受けた者の心に深い傷を残す。本書の主題は、そういう危険な成長期のエネルギー爆発であって、その背景が宗教であるかどうかは、さして重要ではなかったのである。

キャリーの原型となった人物は、他にもいる。キングの回顧は必ずしも一貫していないが、それはトレーラーハウスの中に大きなキリスト磔刑像を置いて生活する貧しい母娘だった。キングは、「あんな母親に育てられるのは、いったいどういう経験だろう」という問いから本書の執筆をはじめ、いわば「シンデレラ物語」の逆バージョンを書き上げたわけである。「根本主義派キリスト教」は、つまるところ、その舞台上に置かれた平板な書き割りの一つにすぎない。

もう少し突っ込んで言うと、主人公のもつ特殊な能力「テレキネシス」(念力)は、「根本主義派キリスト教」とあまり相性がよくない。一見したところ、両者は超自然や非合理という点で似かよっているように思われるが、こうした超心理学(パラサイコロジー)の概念をキリスト教の経験世界に位置づけるのはなかなか困難である。そして、その理由もすぐに理解できる。念力には、神を介在させる必要がないからである。同じ事象を見ても、一方は人間が自力で起こしたものと考え、他方は神が起こしたものと考える。ここには、どんなに型破りの「根本主義派」であつても飛び越えることのできない溝がある。だからキングは、これら両者の擦り合わせに余計な労力をかけたりしなかった。

## 作品に刻印された 女性のセクシュアリティの問題

にもかかわらず、この小説には深くアメリカ的なキリスト教の刻印が押されている。小説の中で名指しされた「根本主義派キリスト教」は、むしろその刻印から目を逸らすための仕掛けなのかもしれない。「根本主義派キリスト教」は、実のところ二〇世紀後半に目立つようになった、いわば最近の産物だが、この小説が全編にわたって明示的に語ることなく前提しているのは、それよりはるかに根の深い、一七世紀ピューリタニズムにまで遡るアメリカ的なキリスト教の歴史的経験である。

読者はまず、この小説の語り口が通常と少し違っていることに気づかされるだろう。地の文を割いて各所に挿入されているのは、架空の報告調書や宣誓証言、雑誌や新聞の記事、それに自伝や研究書などからなる数多くの引用文である。こうした引用文を読むことで、読者はあたかも実際に起きた歴史的な事件の裁判記録を読んでいるかのような気分になる。キングがそれをどこまで意識していたかはわからない。だが、

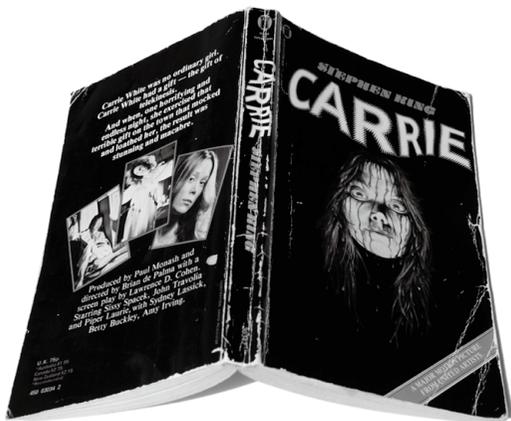
ここでトレースされているのは、一七世紀に起きた二つの有名な歴史的な事件、すなわち一六三七年の異端裁判と、一六九二年に行われた魔女裁判の記録である。どちらも女性が被告となり、女性のセクシュアリティが問題の焦点とされ、そしてどちらもキリスト教的な世界観から有罪の判決が下された。

これらの裁判記録が逐一克明に残されており、今日も容易に読むことができる、という事実そのものが、すでに特異である。結論や要旨ではない。告発者や裁定者の言葉だけでもない。被告となった女性の発言が対話のままの形で詳細に残されているのである。そのやりとりは緊迫していて、どの瞬間にどの言葉が有罪を決定づけたかもよくわかるほどである。同時代の日本にそんな記録は存在しないし、調べたわけではないが、おそらくヨーロッパの国々にもあまりないだろう。ニューイングランドに移住したピューリタンには、それらを記録するだけの「技術」と、それを残したいという強い「意志」があった。

法廷での発言内容を同時進行形で記録するには、速記術という特殊な技術が必要である。ちようどこの頃、英語の速記術が開発されて実用化されるようになったが、ピューリタンには

ぜひともそれを使って記録に残したいものがあった。説教である。彼らの信仰では特に説教が重んじられたので、日曜ごとに教会で語られる説教を聞いてはそれを逐語的に記録し、しばしば出版に回した。植民地時代のアメリカで膨大な数の説教が印刷されたのは、このためである。それと同じ感覚で、彼らは宗教的な裁判の発言を克明に記録した。

一六三七年の裁判は、いわゆる「無律法主義」と呼ばれる異端をめぐるのであった。被告は、四六歳で身重のアン・ハチンソンという女性である。彼女は、聡明な知性で日曜になされた牧師の説教をよく理解し、週日に自宅で集会を開いて隣人たちにわかりやすく解説した。やがてその評判が立つようになると、植民地の宗教的指導者たちは彼女を咎めだてるようになる。男女の混じり合った「汚らわしい(filthy)」集会を開き、女性の分を越えてあるまじき指導的な役割を果たした、という罪状である。裁判記録では、権威ある男たちの告発にも怯むことなく、きちんと論理立てて逐一それを論駁してゆく彼女の姿が浮かび上がってくる。その凛々しい姿が、『キャリー』ではスー・スネルの宣誓証言や調査委員会の聞き取り記録に重なる。



『キャリー』のペーパーバック権が四十万ドルで売れた時の喜びを、キングは「倒れこそしなかったものの、私はへなへなどその場にしゃがみこんだ」(『書くことについて』)と述懐する。

追放刑に処せられたハチンソンには、過酷な運命が待ち受けていた。移住先で先住民の襲撃を受け、一家もろとも惨殺されてしまうのである。報せを聞いたある牧師は、「異端者に神の審きが下つたのだ」とほくそ笑んだという。人生の悲運は神の不興によるものだ、というわか

## 3 思春期を迎えた女性の 痙攣発作セイラム魔女事件

の角が生えていた」などと気味の悪い噂が立つた。すると、それを聞きつけた植民地政府当局は、埋葬後何カ月も経っているその赤子を墓から掘り返し、角や鉤爪などの悪魔的な特徴を確かめたという。今日のホラー映画も顔負けのおどろおどろしい報告である。

出産は、たとえ順調であつても生命の危険に満ちた神秘的な瞬間である。生死を司る神の審きが異端思想への罰と受け止められたのも、当時としてはごく自然なことだった。助産婦たちは、マンドレイクなどの薬草を用いることから、「魔女」の嫌疑をかけられることもあった。生殖にかかわる女性の魔術的な影響力は、魅力でもあり恐怖でもある。こうした魔力が女性のセクシュアリティに由来するものである以上、月経や乳房の発達といった思春期にその危険が飛躍的に高まる、という設定もごく当然だろう。「生理には本能的に女を逆上させる何かがある」——キャリーの初潮騒動を押さえようとしたり若い女性教師ミス・デジャルダンの言葉であ

る。キャリーのテレキネシス発動も、こうした思春期の女性性に強く関連づけられている。物語の幕開けと終末に、ゆつくりと太腿を伝って流れ落ちる経血。ママが「汚らしい枕」と呼ぶ魅力的な乳房の発達。痺れるような性交の快楽とその後には起る悪魔的な破壊衝動。キャリーの中に蓄積されてゆき、やがて臨界を迎えたエネルギーは、高校生男女のセクシュアリティ表出の頂点と言わばきプロムで爆発する。宗教学的に見ると、これはほとんど教科書通りの成り行きである。

そこで想起されるのが、もう一つのセラム魔女事件である。こちらの裁判は、アーサー・ミラーの戯曲『るつぼ』（一九五三年初演）などでよく知られているので、あまり詳細に紹介する必要はないだろう。この裁判の手書き記録も、関係する公立図書館に保存されており、今ではオンラインで読むことができる。事件の発端は、キャリーと同じように思春期を迎えた女の子たちの痙攣発作であり、その悪意に満ちた告発であった。告発を受けたのは、一人暮らしの老女や、財産をもっているが礼拝に出席しない人など、社会的な「はみ出し者」である。魔女事件の舞台となったのは、とあるニューイングランドの牧師館だった。関係者にとって、

それは必ずしも恥ずべきことではない。なぜなら、悪魔は自分がいぢばん忌み嫌われているところにあられるからである。悪魔の攻撃を受けるということは、それだけ悪魔に注目されていることの証拠であり、自分たちが神の特別な選びと顧みを受けていることの印ですらあった。この裁判を通して見ると、母親のマーガレットがなぜキャリーの特異な能力をあれほど怖れたかも、よく理解できる。一歳のキャリーがここにこしながらミルク瓶を宙に浮かせたときも、三歳のキャリーが隣人のおっぱいを見た後に石を降らせたときも、ママを恐怖に陥れたのは、念力の能力が及ぼす物理的な危害ではない。ママにとって、キャリーの女性的な魅力や不思議な能力は、「神聖ではなく異教的なもの」なのである（224頁）。事件の詳細を調べた科学者たちにとっても、同様だった。キャリーの不思議な能力は、既存の権威に対する重大な脅威である。それは、「自然界はかくあるべし」というわれわれの秩序だった概念への挑戦であり、「ニュートンの法則」に対する看過し得ない反逆だからである（76頁）。成熟したキャリーを見るママや科学者たちの眼差しは、まさに魔女裁判で異端を審く宗教的権威者たちのそれである。

## アメリカには 奇妙なキリスト教の歴史がある

アメリカの歴史は、率直に言って奇天烈なキリスト教のオンパレードである。「モルモン教」や「エホバの証人」だけではない。今日われわれが多少とも奇異の目をもって見るようなタイプのキリスト教は、すべてアメリカ由来であると言つてよい。なかには、あまりに特異すぎて消滅してしまった集団もある。そのうち、『キャリー』に関係するものを二つ紹介しておこう。その一つは、キャリーのママと同じように、人間のセクシュアリティを徹底して斥けた「シェイカー」と呼ばれる集団である。一八世紀半ばにアン・リーという若い既婚女性を教祖として始まったこの集団では、ニューイングランド一帯を拠点として、最盛期には合わせて六千人ほどがコミュニケーションのような共同生活を営んでいた。彼らの生活は、すべて男女別々で交わることがない。たとえ夫婦でも、入会すれば別々に暮らした。性は、過ぎ去りゆくこの世の罪であるから、厳格な独身制と非接触を貫いてその誘惑を断ち切らねばならないのである。性

「シェイカー」の名前をもっとも有名にしたのは、礼拝のときのダンスだ。男女が別々に並び霊的な高揚と共に踊る様子は、当時から奇異の目で見られていた。「シェイカー」の名前は「Shaking Quaker（揺れるクエーカー）」に由来する。米国議会図書館蔵、Courtesy of the Library of Congress, Prints & Photographs Division, LC-USZ62-13659



の排除は、男女の完全な平等を実現するための手段でもあった。その平等を示すため、彼らの住居は入り口から階段や手すりに至るまで左右対称に作られており、均整が取れていて美しい。しかし、彼らの名を一躍有名にしたのは、礼拝のダンスだろう。男女が隊列を組んで別々に並び、何時間も整然と踊り続けるのである。封鎖された性的エネルギーは、ここで一気に発散されて強烈なエクスタシー体験となる。それは、抑制された熱狂であり、秩序ある爆発であり、厳粛な大騒ぎである。「聖」と「性」の交錯は、宗教の歴史に数々の彩りある実例を残してきた。シェイカーもその一つだが、生殖を排除した当然の結果、やがて彼らは衰退して消滅した。もう一つは「クリスチャン・サイエンス」で、こちらは今も健在である。彼らの発行する「クリスチャン・サイエンス・モニター」紙は、扇情的なジャーナリズムから一線を画す独立系の一般新聞で、ピュリッツァー賞を何度も受賞した定評ある社会メディアとなっている。

本稿冒頭で「キリスト教と超心理学とは相性が悪い」と書いたが、このグループの創始者メアリー・ベイカー・エディは、まさにその二つを結び付けようとした人である。若い頃から病弱だった彼女は、動物磁気 animal magnetism

や催眠術による心理療法を研究したり、キャリーと同じようなテレパシー感応 telepathic influence の開発を目指したりした。彼女の理解では、これらは最先端の「サイエンス」なのであって、心霊の力を用いて肉体の病を癒やす、今日の言葉で言えばホメオパシーやアーユルヴェエダといった「代替医療」の先駆的試みと言えらるだろう。

新約聖書の記述によれば、イエスもさまざまな癒やしをわざを行つた。クリスチャン・サイエンスは、精神と肉体の交感、信仰と健康の相関を信じる。一般のキリスト教とはかなり距離があるが、罪からの救いなしに人間性の健全な発達はない、という考え方はまっとうで、『キャリー』だけでなくホラー映画全般に通じる話かもしれない。

凄惨な復讐の暴力に満ちた本書だが、「キャリー、わたしの心のなかを見て」というスーの最後の叫びには、和解と赦しの希望がかすかに揺らめいていることも見逃せない。

もりもとあんり 神学・宗教学者。国際基督教大学学務副学長、同教授。1956年、神奈川県生まれ。国際基督教大学人文科学部、プリンストン神学大学院博士課程を修了（Ph. D. 組織神学）。2012年より、プリンストン、バークレーで客員教授を務める。著書に『異端の時代』（岩波新書）、『反知性主義』（新潮社）、『キリスト教でたどるアメリカ』（KADOKAWA）など。